

絡まった糸を解く…「ただひたすら」

合掌

先日、一番下の子が「お父さん、けん玉の糸切って。」と、言って、糸がぐるぐるに絡まった二つのけん玉を持ってきました。それはもう、にっちもさっちもいかないといった感じです。確かに切って付け直した方が簡単そうです。でも、あえて「あのな、切るのは簡単なんだよ。でもね、糸が絡まったということは、必ず解れるということでもあるから、なるべく解くように努力してみることが大事なんだ。」と言って、解くことにしました。しかし、数分後、そうやってしまったことを後悔するほど、糸の絡まり方は半端なものではありませんでした。

絡まった糸を解くことにこだわっているには以前こんなことがあったからです。上の子たちが小さい頃、大分の実家に帰って釣りをしていた時です。子どもですから、すぐに釣糸を絡めてしまうんですね。釣糸の絡まったものほど面倒なものありません。私はすぐに切って新しい糸をつけていました。ある時、私の父と一緒に釣りに行きました。やはり子供が、糸を絡めて持ってきました。私はすぐに糸を切って取り替えようとする、父は「どれ、かしてみい。」と言ってぐちゃぐちゃに絡まった糸を解き始めました。父も年ですから、「手がいうときかん」と言いながらも、次第に糸が解けていきます。驚きました。「昔は、糸やら針やらそげーなかったき、こげえて、絡まった糸も解いて使いよったんじやら。」と言いながら、解いてしまいました。それから私も、なるべく、絡まった糸は解くようにしているのです。

ぐちゃぐちゃに絡まった糸。これをほぐしていくには、まず、絡まった部分をゆっくりとほぐします。いろんなどころをひっぱったり、押し込んだり。これがなかなかいららとするのですが、そこで、短気を起こして、力任せに引っ張ってしまっはいけません。根気強く、やります。すると、「糸口」が見えてきます。一つ解けると、次第に、「糸口」が広がり、ほどけていくのです。こうして、絡まった糸をほどいていくと、人生もこういうものかもしれないと思います。仕事や勉強が上手いいかないときあります。袋小路に迷い込んだように、何をやっても光が見えてこないようなとき。スランプもそうです。もがいても、もがいても結果が出ない。そういうこと、人生には多々あるものです。そんな時、諦めて、放り出したり、やめてしまったりしては、もうおしまい。「朝の来ない夜はない。」なんて言いますが、まさにその通りです。絶対に朝は来る、出口はある、糸口は見つかると思えば、短気を起こさず、ムキにならず、根気強くやることです。

かつて、野球の「ホームラン王」と呼ばれた王貞治選手も、一時期「三振王」と呼ばれた時期がありました。全く打てなくなって、三振ばかりしてしまう。スランプです。そんな時、バッティングコーチから、日本刀で、天井からつるした紙を切るという練習方法を指導され、ひたすら、部屋の中で、天井からつるされた紙を、野球のスウィングで切る練習をしたそうです。ひらひらする紙を日本刀で切るなんて、それこそ至難の業です。しかし、王選手は「ただひたすら」日本刀を振ることを繰り返したそうです。そして、あの独特の片足を上げたバッティングを身につけ、世界の「ホームラン王」になりました。

道元禅師は「只今(しこん)」を大切にしました。訓読みだと「只今(ただいま)」です。「今できることをただひたすら行うこと」という意味です。諸々の事柄に、くよくよせず、憂えず、ただ、今出来ることをひたすらやっていると、必ず光は見えてきます。

人間関係も同じかもしれません。こじれてしまった関係も、絡まった糸をほぐすように、短気にならず、意地を張らず、ゆっくりにゆっくりに、心をほどいていけば、必ず「糸口」が見えてくるものだと思います。絡まった糸を強く引っ張ってしまうように、我を張ってしまっは、余計に絡まってしまいます。

けん玉の絡まった糸をほぐしながら、そんなことを考えていました。途中何度も「糸切ろうかな。」と迷いつつ、いやいや、短気を起こさず、我(糸)を張らず。今こうしていることを修行であると念じながら、「ただひたすら」けん玉の糸をほぐしていききました。そうしているうちに、少しずつ、絡まっていた糸がほぐれていき、なんとかほどけました。やはり、「解れない糸はない」ということです。大変でしたが。要は、不撓不屈の精神。諦めては絶対結果はついてこないということです。開祖は言いました。「自分が負けだと思っまでは負けてはいない。」ということです。

結手